

Title	「あまみエフエム」開局までの道のりとその役割：島のアイデンティティを形成するコミュニティ・メディア
Author(s)	麓, 憲吾
Citation	鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報, 11: 56-62
Issue Date	2014-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/24349">http://hdl.handle.net/10232/24349</a>

# 「あまみエフエム」開局までの道のりとその役割

—島のアイデンティティを形成するコミュニティ・メディア—

特定非営利活動法人 ディ！代表理事

有限会社アーマイナープロジェクト代表取締役 麓 憲吾

## 1. 元ちとせのデビューの衝撃

2002年2月元ちとせが「ワダツミの木」でデビューして、約86万枚をリリースしオリコンチャート1位を獲得します。奄美人（島ツチュ）として彼女を評価すべき点はテレビ・ラジオなどのマスメディアで「奄美出身の元ちとせです！」と伝えられているところでした。かつての島出身アーティストや私自身もそうでしたが、内地において「奄美出身」と言うことを地方・離島の劣等感もありながら、積極的に伝えられない方が多く存在しました。しかし、彼女の活躍とともにシマ唄で培った唱法、そしてその自信に溢れたメッセージによって、具体的に奄美が伝わった出来事は多くの出身者の劣等感を払拭し、アイデンティティを取り戻せたという出身者の声はその後多く認めるところです。

実際、そのようなことを確認できた具体的なお話があります。元ちとせのデビュー後、都内には奄美関係の飲食店が多く出店されましたが、そのあるお店で私が出会った50代くらいの出身者のお話です。「当時、外勤時に車を運転している際のこと、カーラジオからふと流れてきたワダツミの木とともに『奄美出身の元ちとせです！』というメッセージが胸に刺さりました。私は路肩に車を止めて、なぜか涙が止めどなくあふれ出てきたんです。実は上京して30年間、周りの誰一人に対しても奄美出身だということを黙っていましたが、その翌日からそれが言えるようになったんです・・・」。

かつて、元ちとせは地元でシマ唄を歌っていました。それが内地におけるプロデュースによりマスメディアを経由し、地元で逆輸入的に伝わりその感化によってシマ唄への再認識と彼女の存在意義が高まることとなります。このソトからの気づきによって、これまで多くの奄美人がアイデンティティなき勝手な劣等感が生じていたことは、情報伝達の流れや在り方が問題だったのではないかと捉えられます。「己を知らずして何と比べることができ、どのように価値を見出すのか？」これは地元の音楽というジャンルの価値判断だけではなく、歴史・自然・文化など奄美全体のモノゴトとして当てはまるといえます。

私のこのような考えは、2007年に「島ツチュの島ツチュによる島ツチュのための島ラジオ」をキャッチコピーとして開局した「あまみエフエム ディ！ウェイヴ！」に直結しています。しかし、そのような考えは初めからもっていたのではなく、今から25年ほど前から身の上起きた出来事と格闘するなかで次第と思いを強くしていきました。この報告では、その出来事を振り返りながら、あまみエフエムに込められた思いと活動を整理します。

## 2. あまみエフエム開局にいたる二回の契機

私自身の体験談なので、客観的に語ることはなかなか難しいところですが、あまみエフエムの開局にたどりつくまでに、いくつかの契機がありました。ひとつの契機は、私が高校を卒業して一度奄美大島を離れ、都会での生活を体験し、また島に戻ってきた直後に起きた葛藤です。これは80年代後半から90年代後半頃の話ですが、最初は、奄美人としての劣等感という個人的な感情を克服しようとする中から起こった行動が、気がつけば、周囲のニーズを感じる中で、自分自身のことだけでなく島のことを考えながら行動を始めていた時期です。その後、東京から奄美にきたプロのミュージシャンとの出会いによって受けた大きな衝撃から、個人的な感情を解決しようと、仲間が始めたシマ唄漫談なるお笑いライブユニットへの参加やイベントを開催しはじめました。それがちょうど2000年ごろのお話です。この時もきっかけは、「シマを知らない」という個人的な課題のためにとった行動が、実は自分だけの問題ではなかったという気づきから、より大きな仕事につながりました。その仕事があまみエフエムの開局です。

詳しくはあとで述べますが、私は現在、島の人々にとって非日常と日常の両方の世界に向けて情報発信を行う仕事をしています。このような仕事を手がけるようになったのは、最初から計画的に進めたわけではありません。今振り返れば、そういう流れだったんだ！ということがわかるだけで、当時はただがむしゃらに気づいたことにひとつひとつ

つ答えを出そうと必死に考え、行動していただけです。今もまだきちんと整理ができていないわけはありませんが、次に取るべき行動や方向性を確認するためにもやってきたことを見つめ直したいと思います。

### 3. 帰郷とライブハウスのオープン

#### (1) 島च्छुとしての劣等感に気づく

私の暮らす奄美大島では高校卒業時は8～9割程度、就職・進学と島を出て行きます。地元では一度は島を出ることが大人になるための一つの節目という風潮となっています。

私が学生時も雑誌やテレビなどからの情報や先輩たちが成人式や休みなどで内地から戻ってきた際に垢抜けた様子、話す内容・言葉・恰好などに影響され、自らの根拠なき劣等感と共に都会への憧れが増していきました。

私の場合も関東へ就職のために島を出ました。そこで味わった経験や気づきは、今までの存在意義や価値観を覆すとても大きなものでした。今まで島で育ってきた18年間で、温かい親や仲間や環境に囲まれ、「周りあつての包まれている自分」として過ごしていたことを都会に出ることで初めて気づかされます。知らぬ土地、知らぬ人の中で自分の無力さに挫折を感じ、なかなか存在意義を見出せずにいました。職場では「自分」をうまく語るができず、「奄美出身です。」と伝えても当時（1989年頃）誰も知るものがおらず、ますます己が何者であるのか？（あったのか？）ということに対し戸惑うようになります。まさにそれからモラトリアム期を過ごすことになり、週末ともなれば島の同級生と集い、島の言葉で島のモノゴトを語りあい、自分を映し出す鏡のようなものを求め、存在意義や役割を探りました。

ようやく都会の生活にも慣れ4年が経ち、自分の中に都会で暮らす目的が具体的にないことを確認すると、ふと島への帰郷本能に駆り立てられ22歳の時に島へ戻ることを判断しました。今思えば、地元の「私を知る環境」の中で、何か役割を感じたいということだったのかもしれませんが。それから島へ戻り、また後輩たちとの触れ合いの中で自らがソトの世界の知識や経験を、ウチの世界の後輩へ注ぎ、また彼らの劣等感を煽るという繰り返しにも気づきます。

物質的に豊かな都会を経験してきた中、島には何もない！と不満をいうよりも、自分たちで環境を作るべき！と考え始めます。それまでは環境は提供されるものであるという観念しかありませんでした。それから私は棟梁である

父の大工の見習いをし、その傍ら仲間と自分たちの手で環境づくりと、企画運営に関わり音楽イベント活動を公民館や飲食店で行い始めます。地元で娯楽が少ないこともあってイベントを重ねるうちに、多くの演奏参加者・来場者が集まり、コミュニティとニーズが形成されていきます。その結果、イベントの利益性も高まり、利益か？さらなる環境づくりか？と仲間内で価値観が分かれ始めました。「自分たちの城づくり」か、「みんなの公園づくり」か、という岐路に直面しました。自分の関わった活動を他人が必要かつ期待していることに対し、自分の存在意義・活動意義を実感することができていました。判断すべきは「公園づくり」という環境づくりを進めることでした。

#### (2) 音楽で島興し～ロードハウス・アシビ

大島紬やバブル景気はとうに去り、不景気な経済状況の中、新たな環境づくりに対して、趣味から仕事としての転換することの影響、経営維持への不安などで周りからの反対意見も多くでました。地元の金融関係から300万融資を取り付け、大工の経験を生かし改装しました。日に日に消極的であった仲間たちの協力を得ることができ、1998年10月ステージ・音響・照明常設のイベント可能なスペースを備えた飲食店ROAD HOUSE ASIVI（ロードハウス・アシビ）をオープンさせることができました。県内でも天文館につぐ繁華街、屋仁川通り（通称ヤング通り）のほぼ真ん中に立地し、「音楽で島興し」をテーマに地元ミュージシャンを中心にシマ唄～ロックまで様々なジャンルのイベントが週末開催されます。アシビは遊びの意味で島訛りでの発音です。

奄美の音楽活動状況は、本業を持ちながら趣味・遊びと



ロードハウス・アシビのオープン5日前の様子。オープン1日前には、先輩・後輩50名くらいが加勢に来てくれた

して演奏するアマチュアミュージシャンが多く、バンドだけでも 60～80 団体があります。それ以外にもシマ唄、新民謡など音楽文化が盛んなところです。また奄美のシマ唄の歌い手である唄者のほとんどがそれを生業としていません。営みとともにある表現で、これこそが音楽文化の原点であり、それが残されていることが奄美の特色かつ、継続性が高い一つの特徴だと感じています。そのような環境づくりをアシビはサポートしています。

## 4. シマ唄という文化の価値に気づく

### (1) シマ唄

当初、アシビは地元ミュージシャンのための環境づくりが目的ではありましたが、オープンして間もなく、東京のプロのミュージシャンからアシビでの出演依頼の問い合わせがありました。これが初めてのソトとのコミュニケーションを図ることとなります。実際本人が奄美に入られ、島のことについて自然・文化・歴史について質問を受けました。私自身、何一つしっかり答えることができず、まし



仲間と立ち上げたシマ唄お笑いバンド、  
サーモン&ガーリック

てや奄美民謡であるシマ唄に関して、琉球民謡とは旋律が違うこと、裏声を多用していることに感心していることがわからない。そのシマ唄は私にとってみれば、幼少期から耳に馴染んでいるものの雨・風や空気のように感じていて、それが何なのか？と意識的に捉えたことはなく、全国各地のどこにでもある民謡の一つにしか過ぎないものだと感じていました。それが日本の中でもかなり独自性の高いものであることを島外のまたプロのミュージシャンから伝えられました。どれほど自分自身がウチのことを知らず、ソトに目を向け続けていたことに気づかされます。それから私たちの奄美の音楽文化シマ唄をも踏まえ、島を音楽で盛り上げていくことを考え始めます。そのころ知人がシマ唄漫談なる「サーモン&ガーリック」というお笑いライブユニットを結成し活動を始めました。シマ唄を歌い関わる若い世代は少なからずいるものの、聴き手としての若い世代というのは成り立っておりません。このままでは今後「歌」というコンテンツのみの価値が伝統文化として継承される構図を危惧しました。そこで、その「歌」を生み出す環境、その「歌」を伝える環境の必要性を感じ、敷居を低く、間口を広く、お笑い要素や曲にアレンジを加え活動を行っていきます。

その後シマ唄のみならず、奄美の自然・文化・歴史が若い世代へもっと具体的におもしろい・かっこいいものであるということを伝えるためのイベントを企画します。それが「夜ネヤ、島ンチュ、リスベクチュ！」(今宵は島の人に敬意を!)というイベントです。サーモン&ガーリックをはじめ、デビュー前の元ちとせ・中孝介などの若手唄者とともに実行委員会を立ち上げ、度々イベントを開催し、島に生まれ育ったことに対して自信と誇りを宿す機会を重ねていきました。

### (2) 集落の青年団

その「夜ネヤ～」には、各集落の青年団の八月踊りや余興などのステージ披露も設けています。青年団は各集落で清掃作業、豊年祭、敬老会など、多くの地域行事・作業に関わり大切な役割を担っています。もちろん彼らのほとんどが一度島を出た経験を持ち、そのおのおのが島に戻り、生まれ育った集落に暮らし、煩わしい人間関係や集落作業もありながら役割を担っています。そのような各青年団が、奄美市名瀬生まれでそのような関わりのない街っ子の私は、とても遅く思えました。彼らの集落での営むさまは



集落での青年団活動  
～八月踊りの練習風景

次世代の子どもたちにも影響を与えます。島を出ていくまで彼らもその役割を果たす時に気づき、島に戻らねばという帰巢本能に駆られるのではないかと思います。ある意味、その集落・コミュニティでの役割がアイデンティティを形成する一つの要素といえます。しかしながら、その青年団のような価値観・活動を対外的に伝える術が少なく、また伝えるべき対象である大人と子どもをつなぐ橋渡し世代である20代前半の多くが、就職・進学と島外に出ています。その感化すべき対象である内地へ出て行った若い世代へ向けて、東京でのイベント開催を目論みます。

### (3) 東京でのイベント開催

2002年1月東京渋谷クアトロで夜ネヤ～を開催企画しました。初めての東京での開催です。知り得る在京の奄美出身の先輩・後輩・同級生にイベント開催を呼びかけます。



奄美群島日本復帰50周年イベント  
夜ネヤ島ンチュ、リスペクチュ！奄美群島青年団による万歳

しかし、島出身の先輩たちは、イベント開催には大変消極的で「この都会で地方をテーマにしたイベントは成り立つはずがない。」と言われました。

とはいえ、週末ともなれば出身者同士で集い、島を想う一方、「だから島は、(島ッチュは)ダメなんだ！」というふうに、島のモノゴトを軸に共感や否定の感情が揺さぶられるさまは幾度も垣間見てきました。そこには必ず、愛憎を含めてニーズがあると開催にこぎつけました。蓋を開けてみれば800名の収容量の会場に900名が詰めかけ、デビュー前の元ちとせを中心に島内外の出身者のアーティストと黒糖焼酎と島口が飛び交い、会場一体が奄美と化しました。かつての私だけでなく多くの奄美人が劣等感を覚えたこの東京の地で、奄美人として優越感を得た出来事となりました。そして、その1週間後に元ちとせが世に放たれデビューします。

### (4) 奄美群島日本復帰50周年

冒頭で紹介したように、2002年に元ちとせがデビューし、島に大きな衝撃を与えました。その翌年の2003年に奄美は日本復帰50周年を迎えました。

恥ずかしながらこの50周年を迎えるまで、終戦後1945年から1953年の8年間奄美が米軍統治下に置かれていたという歴史を意識することはありませんでした。そのような無意識を省みて、この50年を経て先人が島の未来をどのように切望していたのだろうかと考え、当時私が31才という年齢でこのような節目を跨ぐ世代として島興しに関わる以上、若者の手で何かを興し刻まなければならないと感じました。それから各島々を周り奄美群島の全青年団に声をかけ協力と参加を呼びかけ、奄美パーク野外ステージにて夜ネヤ～を開催することができました。二日間で入場者は累計約6000名です。このイベントを通しての大事な気づきは、島をテーマに島のモノゴトを島ッチュの手によって、時代・環境を作り上げることができるという可能性を確認できたことです。その後、このイベントの様子は県域局のドキュメンタリー番組<sup>1</sup>により開催までの経緯や目的が伝えられました。そのことによって、更に理解が得られその反響にメディアの影響力を私自身感じる一つのきっかけとなりました。

この経験を通して、イベントというある意味「祭り」と

<sup>1</sup> YouTube「2003年夜ネヤ島ンチュリスペクチュ！」は次のURLより閲覧可能。[https://www.youtube.com/watch?v=NUy\\_abxUsAU](https://www.youtube.com/watch?v=NUy_abxUsAU)

して非日常での意識に対するパフォーマンスと、日々の放送という日常での無意識に対するムーブメントという二つの働きかけを区別して認識することになります。

## 5. 気づきの装置としてのコミュニティ・メディア

### (1) 特定非営利活動法人ディ設立

そこから「島ツチュが島のことを知ることから始める」ということがテーマとなります。そのために日常的な情報伝達というツールが奄美にも必要だと感じました。

島内でのメディアといえば、もちろんテレビ・ラジオ等、約 380 Km離れた県本土からの放送を通しソトの情報を受信できます。そのような一方向で雨のように降り注ぐような形でなく、井戸や泉のようにウチから湧き出るものを自ら浴びるような島の情報の循環・感化のような日常スタイルが構築する伝達手段は？と模索している中で「ラジオ」という音声媒体での情報伝達がよいのではないかと気づきます。新聞・本・インターネット等の能動的媒体には意識的に触れますが、テレビはじめラジオなど受動的媒体は無意識に触れることを考えると、これまで無意識に劣等感が生まれてしまった状況において、アイデンティティを育むにはその無意識に改めて、島のモノゴトによる情報や価値



島にもラジオがあったら・・・  
イベントでの模擬パフォーマンス

の提案を注ぐ必要があるのではないかと考えました。

その後、コミュニティFMという制度を知ることになります。ただ、「島」という生活経済圏が同一といえるコミュニティ全体にラジオを！というイメージを持っていたのですが、残念ながらコミュニティFMの制度は、基本的に行政区分である各市町村を対象エリアとした地域FMということであり、よって奄美市のラジオ局という位置づけとなりました。それからコミュニティFMの運営の在り方を奄美市における容量を踏まえて検討し、ボランティアスタッフの参加による番組作り、サポーター会員の支援による運営というスタイルを目標にNPO法人での開局準備を目指し、まず有志とともに2004年11月特定非営利活動法人ディ！を設立しました。（ディ！とは島口の感嘆詞で「さあ！」という行動を促すための掛け声です。）全国のコミュニティFM開局数は2015年1月現在286局あり、そのほとんどが株式会社か第三セクターであり、NPO法人局は27局（県内は12局中8局と多い）となっています。地元新聞に協力依頼広告も掲載しました。サポーター会員、広告協力企業を募るにもこれまで島にラジオ局がないこともあってイメージを捉えてもらえません。そこで、イベントでのミニFMパフォーマンスを重ねて、島にもラジオができればこのような放送スタイルになるというアピールを行いました。

サポーター会員は開局前に約500名、広告協力企業が約50社募ることができ運営計画が立てられ総務省九州総合通信局への申請が進み始めました。

あなたの会費と  
わたしたちの汗で  
ホントに実現します!

# ディ!

## 声を出そう。

あなたは、本土の放送局だけで満足ですか？

**ディ!**  
〒894-0031 名瀬市金久町4-3  
FAX0997-53-2230  
e-mail: info@npo-d.net

NPO「ディ！」について

NPO法人 「ディ！」は、島ンチュの「結い」を大切にしながら、島づくり・島興しの推進を図る非営利活動団体(NPO)です。自ら考え、行動し、地域の人たちの意識を変革し、チカラにしてゆくことを目的としています。「ディ！」の事業は、談話や開局、今までの奄美にないものが必要という発想ではありません。島に既にあるいろんなモノやコト、奄美らしさを見つめ直すことで、多くの人を結びつけ「結い」を再生してゆきます。

## (2) あまみエフエム開局

その後、ハード面では地元の唯一の電波業務関わる株式会社 奄美通信システムなどの強力な技術サポート、そしてスタジオ・事務所工事と放送制作などのソフト面と資金では私が経営するイベント会社、有限会社アーマイナープロジェクトがサポート、更には地元の500名近くのサポーター会員によって、2007年5月に「島ツチュの島ツチュによる島ツチュのための島ラジオ」というキャッチコピーを掲げ、あまみエフエム ディ！ウェイヴが九州総合通信局管内での離島初として開局しました。スタッフは未経験の島興しに賛同する30代、5名で（現在11名）スタートしました。放送内容は、南海日日新聞・奄美新聞など地元二紙の記事提供による島のニュースや天気予報、空路・航路、お悔やみの案内、島口格言や島口ニュースなど島に特化した放送を行っています。



2階にあまみエフエムのスタジオ兼事務所、  
1階はロードハウス・アシビ

放送が開始され、島出身者のアーティスト・唄者の音楽がマスメディア経由ではなく地元のラジオ局によって日本で一番流れているというようやく当たり前の状況となり、また島の自然・文化・歴史のことが島口で語られ始めました。私たち島ツチュ自身が関わっている島のおもしろさ、かっこよさなどが伝えられ、そこでラジオ局の目的であった共感や拡がり生まれ始めます。一方、違和感も生まれました。「私の地域ではそのような島口は使いません！」とお電話を頂きます。これまでのメディアからは気づくことのなかった感覚です。おのおのの地域の言葉や在り方の「違い」を放送により計り知ることができています。このことから各地のアイデンティティを確認するための相対的

な対象にもなるという役割にも気づきました。

これまでは自らが何者かさえ理解しえないまま、島外からの情報をもとに価値観や行動を促されていました。開局以降、共感・違和感のどちらにせよ、その感情が島のモノゴトを対象にしているというあたりまえで、あるべき新しい環境となったわけです。教育現場においては、かつてはみられなかった奄美に関連する音楽が流れ、子どもたちや各集会、行政や民間でも「ウガミンショ〜ラ（こんにちは）」というあいさつも照れ臭く再び聴こえ始めています。私たちの放送により良い意味で世間・空気感が醸成できている表れだと感じています。その後、奄美大島内には、行政100%出資によりNPO法人が運営する公設民営で2009年にエフエムうけん、2011年にエフエムせとうちが開局し、2014年に民間でエフエムたつごうが開局しました。また、あまみエフエムが規制緩和により隣接する大和村のエリアをカバーできるようになり、奄美大島内のほとんどがコミュニティFMの電波で包まれることとなりました。

## 6. さいごに

アイデンティティを形成するための情報伝達はテレビ・ラジオなどメディアだけではありません。そもそも先人や親、また地域のコミュニケーションでアイデンティティは伝えられるはずなのです。その伝えるべきことが伝わらなくなったことを考察しなければなりません。ソトの一方から注がれる情報感化に対し、ウチからウチへと浴びる情報感化ということを補完する役目が「ラジオ」というメディア、あまみエフエムになります。今後もまた奄美から子どもたちが島を巣立っていくこととなります。それまででできるだけ多くの島のモノゴトに触れる機会を設け、島に暮らす自分自身の役割を感じることで、そのコミュニティでの存在意義というアンカー（錨）を下すことができます。「個人として、島ツチュとして、何者であるか」という意識、そのアイデンティティを宿すことにより、島を出てソトのモノゴトに触れたとき、そのウチなる軸を持って対比することでウチ・ソトとの共感・相違を理解判断できることとなるでしょう。そのアンカーを下せたことよって、「島へ戻ることを前提に島を出る！」という帰巢本能が高まることとなり、奄美の人口減少に歯止めをかける一つの長期的解決方法として、この循環構図を構築することが必要だと日々活動しています。

私自身の主観的な劣等感から生まれた課題への気づき

が、アイデンティティ獲得に向かい、またそのことにより地域の客観的課題を見つけ、解決への行動によって、ひとつひとつ周りの変化を感じることができ、また新たな課題を見つけることができています。主観なる客観を感じ、客観なる主観として行動する、そのような気づきの築きを繰り返しています。今後も奄美というコミュニティの中で、「メディア」というコミュニケーションの在り方を模索していきたいと思います。